TESS OF THE D'URBERVILLES

A PURE WOMAN

FAITHFULLY PRESENTED

BY

THOMAS HARDY

WITH INTRODUCTION AND NOTES

BY

K. JIMBO

PROFESSOR OF ENGLISH IN THE TOKYO HIGHER NORMAL SCHOOL

KENKYUSHA

1928

KENKYUSHA ENGLISH CLASSICS

研究社英文學叢書

大正十一年四月 七 日印刷　大正十一年四月 十 日發　行
昭和 三 年八月二十日印刷　昭和 三 年八月廿五日訂正三版發行

主幹者　岡倉由三郎
主幹者　市河三喜
發行兼印刷者　小酒井五一郎
東京市麹町區富士見町六丁目五番地
印刷所　研究社印刷所
東京市牛込區神樂町一丁目二番地

發行所　研究社
東京市麹町區富士見町六丁目五番地
電話九段四〇二・四〇三番
振替口座東京二八六〇一番

非賣品

新榮社製本所

“TESS” の巻頭に

“Tess” は運命の物語である。氣まぐれに古實の穿鑿だてをする牧師 Tringham の、ふとした言葉の端に、さなくは無事に醉生夢死した筈の一行商人 Jack Durbeyfield の心の眠が、Sir John として俄に高慢の眼を覺ますに至り、D'Urberville の正統ぞと由なき肩を聳かすそのあやしの足もとは、いたましや、しどろに亂れて、同じ苗字の成上り者 Simon Stoke の不良の子 Alec づれの罠に係り、純潔至誠のいとしの美女 Tess は、その愛人 Angel を離れて、大事な一生を暗黑の衢に彷徨ふことになり、遂には、世にも怖しい殺人の大罪を犯すに至る、“Tess” は寔に運命の物語である。

その運命の物語 “Tess” の一篇五百頁の解題と註釋とは、去年のまだ若い頃、神保氏の擔任と定まつたのであつたが、數ケ月經てから、公務多忙の故を以て一旦某氏にその事業が委ねられた。處がそのまた某氏が、數ケ月の後、多忙の故を以て之を辭せられた。丁度その頃小暇を得られた神保氏は遂に意を決して元々通りの執筆を請合はれた。かくして昨年も暮れ本年の初に至つたのであるが、神保氏は相變らず多忙でその上をりからの流感にさへ罹られ、思ふ樣の執筆が不可能となられた。豫定は大に狂つて、三月に出版の豫告は遂に履行がむづかしくなつた。その際、助力を惠まれたのは新里文八郎氏であつた。神保氏が非常な苦心で蒐められた、主として語學方面の手廣な註釋資料の骨骼に血と肉とを短日月の間に必死になつて添へてくれられたのは同氏である。解題の大部分は神保氏の筆に成つたもので、作物の梗概は新里氏の筆に成つたもの。本書の成るに至るまでには斯の如き經緯があつて、

漸く今茲に完成を告げ得たのである。その間、兩氏の苦心は實に甚大なものでつた。この點から觀て、本叢書の“Tess”も亦寔に運命の物語である。

以上の事情を述べて執筆の兩氏の多大な勞を謝し、併せて本書の刊行が一月遲れた次第を、一言讀者にお詫び致す。

大正十一年四月三日　　岡倉由三郎

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook

INTRODUCTION

I. THOMAS HARDY の小傳

Thomas Hardy は 1840 年 (我が天保十一年) 六月二日英國南部なる Dorsetshire の都會 Dorchester 附近の一小村 Upper Bockhampton といふ處に生れた。その父は建築技師で、母は Melbury Osmund の地主の家柄から入つて Hardy 家に嫁した人である。Hardy 家の祖先を尋ねると、Dorsetshire の海岸に近い Melcombe Regis といふ處に始めて居を定めた同名の Thomas Hardy といふ人に發して居る。此の人は元フランスに近い Jersey 島の總督 (Lieutenant General) であつた Clement le Hardy といふ人の子 John le Hardy の末流である。彼の有名な水師提督 Nelson の部下に在つて旗艦 "Victory" 號の艦長をした Admiral の Sir Thomas Masterman Hardy も矢張り同じ系圖中の人であつた。

Thomas Hardy が十六歳の時、彼は Dorchester に開業して居た寺院建築技師 Mr. Hicks といふ人の門弟となつた。十九歳の時 London へ行き Royal Academician の Sir Arthur Blomfield 氏に就いて學び、兼ねて King's College へも通つて勉强した。1863 年 Hardy 二十三歳の時 "Coloured Brick and Terra-cotta Architecture" といふ題の論文を書いて、英國建築協會 (Institute of British Architects) の賞牌を受け、又同年建築の圖案に對して Sir W. Tite 賞を受けた。

Hardy が公に筆を取つたのは "How I Built Myself a House" といふ一文を 1865 年三月の *Chambers's Journal* に載せたのに始まる。而してその頃一方で頻に詩作を試みて居た。彼の二十二歳乃至二

十七歳の數年間はその詩作準備時代で、彼自身も後に詩人にならうと志して居た。しかし彼の名を世に擧げさせたものは詩ではなくて、小說の方が先であつた。

小說としての試筆は蓋し *The Poor Man and the Lady* と題するものであるが、之は遂に世に出す機會を得なかつた。それは、此の小說をは始め Chapman and Hall 社で出版する筈であつたのを、George Meredith が原稿を讀んで Hardy を呼び、書き直した方がよからうと忠告した爲めであるといふ。而して次に書いた *Desperate Remedies* こそ世に出た彼の小說の第一册である。その出たのが 1871 年、彼の正に三十一歳の時であつて、三十一歳といへば文人として可なり晩成であるといつてよい。之に續いて 1872 年には *Under the Greenwood Tree* を、又 1873 年には *A Pair of Blue Eyes* を出した。是等が彼の初期の作品であつて、之によつて彼は愈々小說家としての地步を占め、今迄勉强した建築家の職業を放擲して文壇に立つことになつたのである。

次いで 1874 年(三十四歳)に *Far from the Madding Crowd* を公にし、此の年に彼は結婚した。その夫人となつた人は J. A. Gifford といふ人の娘で、Archdeacon Gifford の姪に當る人である。結婚後二人は始め Sturminster Newton (Dorsetshire の北部、*Tess* の中に出る "Stourcastle" がそれである) に住んで居たが、後に London に移り、又 Wimborne (Dorsetshire の東部、彼のいはゆる "Warborne") に移り、終に Max Gate といふ處に永住することになつた。

Far from the Madding Crowd は彼の作品中最も人望のあり、而して彼の名聲を高めたものであつたが、始めて公にした時は匿名であつたので、世人は George Eliot の作であらうと云ひはやしたが、一部の人々の間には Eliot の書くものよりも以上の作だと認められたといふ。その後引續いて毎年又は一二年おきに多くの小說を出したが、その中で最大最高の作品といはれるものは *Tess* 及

び *Jude* である。年代順に云つて最後に出た小說は 1897 年の *The Well-Beloved* であるが、之は前に (1892 年) 一度出したものの改作である。且つその後發表した數箇は短篇であるから、眞に最後の長篇小說は *Jude* であるといふべきであらう。*Jude* は *Tess* よりも更に深刻に突込んで人生の諸相、殊に男女關係の事實を描寫したため、世間から受けた批評は毀譽相半するといふ有樣であつた。多分その爲めであらう、彼はその後小說に全く筆を絕つて詩人と變つてしまつた。

詩集として出した最初のものは 1898 年の *Wessex Poems* であつて、正に彼の五十八歲の時である。青春の時代に詩作を試みたことは有つたけれども、いよいよ詩集として世に公にしたのは世の詩人に比べて甚しい晩年といはなければならない。續いて二三の詩集を公にし、小說家の外、詩人としての地步を確實に占め得たのみならず、1903 年以後 1908 年迄に亘つて公にした *The Dynasts* と題する雄篇は彼の小說をもこめた全作品を通じて最大のもの、否古今にも稀な大作であるといはれる。此の詩は Napoleon を中心とした諸事件を題材とし、彼自ら名づけて Epic-Drama と稱するものである。此の詩に於て彼の世界觀人生觀は、その小說に含まれたるよりも更に一層の直截味と一層の情熱とを有して居る。(*The Dynasts* に就いては東京帝大英文科の人々が年々出す「英文學研究」の第三輯 (大正十年發行) に岡田哲藏氏の紹介の文が載せてある。)

是等文藝上の功績を認められて、彼は英國政府より "Order of Merit" 勳章を授けられ、又 1910 年十一月には Dorchester 市の公民權 ("Freedom") を與へられ、傑出した者でなければ得られない二つの名譽を擔ふに至つた。

Hardy は尙その後も最近の世界大戰に際し二三の小作を公にして居る。今 (大正十一年) 彼は丁度八十二歲、人生の老境に入つた

とはいへ、多數の小說を書き終へて一たびは詞藻が枯れたかと世に思はれた後にも、一轉詩人と變つてはあれ程の名作を再び產出して世を驚かした。滾々として湧いて出づる情想の源泉のゆたかさを思へば、今なほ彼は「現代の作家」であつて、文筆上の長い經歷に最後の幕が閉ぢられたとは思へないのである。

II. 著作年表

彼の作品の年代は次の通りである。

—— 小說 ——

1871. *Desperate Remedies.*
1872. *Under the Greenwood Tree.*
1873. *A Pair of Blue Eyes.*
1874. *Far from the Madding Crowd.*
1876. *The Hand of Ethelberta.*
1878. *The Return of the Native.*
1880. *The Trumpet-Major.*
1881. *A Laodicean.*
1882. *Two on a Tower.*
1886. *The Mayor of Casterbridge.*
1887. *The Woodlanders.*
1888. *Wessex Tales.*
1891. *A Group of Noble Dames.*
1891. *Tess of the D'Urbervilles.*
1892. *The Pursuit of the Well-Beloved.*
1894. *Life's Little Ironies & A Few Crusted Characters.*
1895. *Jude the Obscure.*
1897. *The Well-Beloved.* (1892 のを改作したもの)

—— 詩 ——

1898. *Wessex Poems.*

1901. *Poems of the Past and the Present.* (出版は 1902)

1904. *The Dynasts,* Part I.

1906. *The Dynasts,* Part II.

1908. *The Dynasts,* Part III.

1909. *Time's Laughingstocks and other Verses.*

——その後の作物——

1913. *A Changed Man, The Waiting Supper, and other Tales.*

1914. *Satires of Circumstance: Lyrics and Reveries, with Miscellaneous Pieces.*

Songs of the Soldiers (1914). *Letters on the War* (1914). *Before Marching and After* (1915).

III. HARDY の小説

澤山に顯はれた Hardy の小説は一々皆趣を異にすること勿論であるが、之を內容の或る性質によつて幾つかの類に分けることが出來る。Hardy 自身がなした分類といふものに從ふと、

I. Novels of Character and Environment.

1. *Tess.* 2. *Far from the Madding Crowd.*
3. *Jude.* 4. *The Return of the Native.*
5. *The Mayor of Casterbridge.* 6. *The Woodlanders.*
7. *Under the Greenwood Tree.* 8. *Life's Little Ironies.*
9. *Wessex Tales.*

II. Romances and Fantasies.

10. *A Pair of Blue Eyes.* 11. *The Trumpet-Major.*
12. *Two on a Tower.* 13. *The Well-Beloved.*

14. *A Group of Noble Dames.*

III. Novels of Ingenuity.

15. *Desperate Remedies.* 16. *The Hand of Ethelberta.*

17. *A Laodicean.*

IV. Mixed Novels.

18. *A Changed Man, The Waiting Supper, and other Tales.*

となる。

所が Abercrombie 氏は Hardy の小說全體を合せてゴシックの寺院建築に譬へた。卽ち各篇の "artistic significance" に從つて觀察すると或る者は建築の主要部分に當り或る者はその附帶的部分に當るといふ。之を詳しくいへば、(1) *Far from the Madding Crowd,* (2) *The Return of the Native,* (3) *The Mayor of Casterbridge,* (4) *The Woodlanders,* (5) *Tess of the D'Urbervilles,* (6) *Jude the Obscure* の六篇は最も重要なもので、之を合して寺院の主要建物大伽藍若しくは嚴めしき太柱の並び立つ nave に譬へる。わけても *Tess* と *Jude* とは、作の組立からいつても含まれる內容の深みからいつても、特に著しい區別が認められるので之を堂の左右の transepts に譬へる。さうすれば *Under the Greenwood Tree* は porch 又は ante-chapel に當り、(小說ではないけれども) *The Dynasts* は最も神聖なる祭壇に當るといふのである。その餘の數篇、*Wessex Tales, Life's Little Ironies, A Group of Noble Dames, A Few Crusted Characters, The Trumpet-Major, Two on a Tower* 等は附屬建造物に當る。更にその他の數篇はいづれも輕い作品であつて Hardy の天才の發揮される「準備」若くは大作の間に挿まる「休息」の期間に當るものであると考へられる。

以上の分け方は Hardy が若年の頃建築業に携はつた事實と思ひ合せて一種の意味を感ずると共に、多くの作品の比較的性質を知るに都合がよいと思ふ。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook

IV. Wessex 其他の地名

Hardy の小說は總て Wessex と稱する地方を舞臺として居る。Wessex とは England の一部であるが、今日存在する名稱ではない。元來 Wessex は West Saxon から轉じた語で、紀元五世紀、いはゆる Anglo-Saxon 人が北歐の東隣から英國に渡つて「七王國」を建設したと傳へるその一つである。有名な King Alfred の出たのはこの West Saxon Kingdom であつて、十世紀の頃 Norman Conquest の始まる頃まで續いたのである。この地方は England の南端、今日の Devon, Dorset, Somerset, Wilt 等の counties に當る部分である。Hardy の描いた事柄は現代であるが、故らに今日の地名を避けて古めかしい Wessex といふ地名を復活させたのである。恰も我國で青森縣秋田縣などいふ代りに「みちのく」といふ名を使つたと同じ樣に、あまり現實に過ぎるのを避け artistic な色彩を帶びさせるといふ用意からであらう。

啻に Wessex のみならず、其の中に出て來る町や村や山川林野等、一々假作の名を用ひてある。しかしそれ等は大概現存する地名の代用であつて、Oxford を "Christminster" (*Jude* に出る) といひ、Salisbury (Wiltshire) を "Melchester" (*Tess*, *Jude* に出る) といひ、Dorchester を "Casterbridge" (小說の表題にも出る) といふが如きその例である。而して中でも Dorsetshire (いはゆる "South Wessex") は Hardy の故鄕である故か、彼の小說の舞臺の最中心となる地方であり、本書 *Tess* もやはり主として此の地方を土臺として居る。

V. "Tess" について

Hardy の小說は他にも例があると同じ樣に、色々の雜誌に續き物として出したのを後に單行本に纒めたのが多い。*Tess* もその一

つで、はじめ雜誌 *Graphic* の 1891 年七月から十二月迄に亘つて連載したものである。而して後にそれに一二の部分を附け加へて今日の形とした。通例 *Tess* と略していふその表題の全部をいへば *Tess of the D'Urbervilles. A Pure Woman.* である。Tess とは此の作の中心をなす女の名である。"South Wessex" の北部にある "Marlott" (實は Marnhull) といふ片田舍に住む行商人 John Durbeyfield の娘で、父は酒呑みの怠け者、母は徒らに多くの子女を生んで家の世話に齷齪する女。或時知り合の牧師 Tringham といふ物好き男が、Durbeyfield は昔の貴族の家柄 D'Urberville 家の後裔であると言ひ出して、之を Tess の父に告げたので、父は忽ち得意になり、益〻大法螺吹きの一層の怠け者となる。之がそもそも Tess の不仕合せの始まりである。それから一生涯の間、家の爲め、自分の爲め樣々の悲運災厄に遇つて終に非業の死を遂げるといふ筋。いかに名も無き田舍娘とはいへ、うら若き年頃から早やくも憂を知りそめて、續け樣に出逢ふ苦勞の數々は此の物語を讀む人々の涙をそそらずにはおかない。

話の組み立てからいへば *Tess* と *Jude* とは他の小說と全く趣を異にする。例へば *Far from the Madding Crowd* の如き、二人の男と二人の女とがあつて、其の間に戀の四角關係が成立ち、事件は縱橫樣々にもつれもつれて進んで行く、いはば Dramatic の形を具へ、音樂に譬へれば四部合奏の和聲の進展に似た結構であるが、*Tess* と *Jude* とは之に反して、Tess といふ一人の女、Jude といふ一人の男が中心となり、その一人の出逢ふ事件を次々に叙して行く。いはば Epic form であり、獨奏樂器の美しい旋律を思はせる。殊に *Tess* の方は主たる人物が、かよわき女性であるといふ所から、一つ一つの出來事に遇つて不幸から又不幸へとぐんぐん落ちて行く途行きを追ひつつ、讀む者もそぞろ哀れに胸打たれるのである。

しかしながら *Tess* に表はされた作者の意は單に一女性に對する安價な涙を搾らせる爲めではない。人の幸福を守る神と悲運を司る惡魔とが一個の人間を弄んで相鬪ふといふやうなものでもない。*Tess* の一篇に表現された事件は單純であつて、plot の交錯、組合せの複雜さは多くはない。それ故に却つてその奥に横はる深い意味を掬み取る餘裕が與へられる。Hardy に從へば宇宙を司配し人生を貫く一つの「意志」がある。この意志は本來善でもなく惡でもない。唯だ大自然の推移に顯れ、單純に先へ先へと動いて行く不可知的、盲目的な「力」である。而して大自然に造り出された地上の人は、それぞれ矢張り自らの命を驅つて進まんとする小意志を持つて居る。非情の木石ならば大意志の力に對して默々として服從しつつ、爲さるるが儘に轉々するであらう。しかし人間の小意志は自らを主張せんとする努力をなす。茲に於てか大意志に對する反抗が起り、茲に於てか悲劇が起る。憐むべき女性 Tess の身の上は正にこの意味の悲劇である。一たび幸福と見えた生活が忽ち變じて、いたましい不幸となるとき、いつも讀者に、あゝ此處の所で此の事件が一寸斯うなつて居たならば、かくまで不仕合せには陷らなかつたらうものを、と思はせる。しかしながら最早自然の大意志の前には如何ともすることが出來ない。世の批評家は Hardy の思想を pessimistic であるといひ、又彼を fatalism, determinism の信者であるといふ。けれども一方に於て、宇宙を貫く「一つの力」を認める點、而も同時に地上の人の小意志に對する深い同情のこもつた點より云へば、必ずしも單純な悲觀論でもなく、宿命論でもない。最後のページを讀み終へてから、再び戻つて全篇を回想して見よ。父母が一圖に緣者と思ひ込んだ僞の Alec D'Urberville の家に Tess が始めて嫌々ながら訪れる時、終に忌はしい Alec の肉慾の犧牲となり終る時、戀人 Angel Clare との結婚の夜、過去の經歷を打ち明けた Tess の言葉を聞いて餘りに社會の

因襲に凝り固まつた Clare が俄然今迄の態度を變じて「手品」("prestidigitation") なぞいふ酷い一語を投げて呵々大笑する時、荒涼暗澹たる Flintcomb Ash の勞作者が骨を削る苦しみの中を讐敵 Alec に附き纏はれる時、殊に最後の一場"'Justice' was done, and the President of the Immortals (in Æschylean phrase) had ended his sport with Tess" といつた結末に逢着する時、Hardy の謂はゆる "Immanent Will" の大威力の下に壓せられる小意志の喘ぎを耳にする度ごとに、"So the two forces were at work here as everywhere, the inherent will to enjoy, and the circumstantial will against enjoyment."—(*Tess*, p. 171, ll. 1–3.) の一句に表はされてゐる彼の世界觀人生觀が明かに窺はれ、哲學が十分に讀める。たゞ「哲學」とは餘りに冷たい語である。Hardy の目的は冷たい堅い哲學を論じようとするのではない。

見よ Talbothays Farm の牧場で Angel Clare と戀に落ち、甘い胸の轟く思ひに醉ふばかりの心を描く濃艶の一節。人通り絶えた山の中で怪しい男に追ひかけられ、思はず他人の狩獵地に逃け込んだ時、狩人に傷けられた雉子の斷末魔の苦惱を見て、身につまされての涙をぽたぽたと落しつつ、その苦しみを逃れさせたさに雉子の首の骨を折つて息の根を止めてやる一節。思はぬ大罪を犯した後、人目を避けて元の戀人 Clare と空家の中に數日を過す一節。更に最後の場面で、夜をこめて Stonehenge の中に身を横へた明くる朝、夫の胸に兩腕を投け掛け、愛する妹の後事を托し、"Tell me, now, Angel, do you think we shall meet again after we are dead?" と搔き口說く一節、一讀思はず顏を掩うて嗚咽を禁ずる能はざるものがある。

吾等は Hardy の世界觀を知つて、その哲學的考察に溢れる許りの同情の念を含めて、藝術の姿に磨き上げたのが實に *Tess* の一篇であると思ふ時、一層意味深く本書が味はれるのである。その

地點から近よれば Tess の罪も不幸も、明かな理解と溫かい思ひやりを以て之に對することが出來る。"A Pure Woman" と云つた sub-title の意は決して皮肉でも反語でもなく彼の Thomas Hood が *The Bridge of Sighs* の末句で歌つてゐる樣に、

> "Owning her weakness,
> Her evil behaviour,
> And leaving, with meekness,
> Her sins to her Saviour."

と觀じ得るものである。

蓋し Hardy の上述の思想は、たゞに *Tess* ばかりでなく、彼が作品の多くを通じてその基調をなして居る。勿論その中で輕い作品、例へば *Desperate Remedies, A Pair of Blue Eyes* 等は plot の構成に餘計意を注いだ跡があつて、如上の深い意味を看取することが困難であるが、*Far from the Madding Crowd, The Return of the Native, The Mayor of Casterbridge* などに至つて漸く深みが加はつて來る。殊に、既に *Under the Greenwood Tree* あたりから鋒鋩を顯はし始め、*Far from the Madding Crowd* などで益〻妙味を加へて來た自然界の叙景の靈妙な筆致は *Tess* に至つて idyllic な牧場や田舍道、森や田畑など畫の樣な景色と、中心の世界觀人生觀の低流と渾然融和して、最高の藝術として恥しくない作品を成した。この點からして *Tess* が彼の小說中の首位に推されて居るのも尤もと思はれる。

VI. "Tess" 以外の作品の梗概

1. *Desperate Remedies.*

Cytherea が Miss Aldclyffe に使はれるやうになる。意外にもそれは、昔 Cytherea の父 Ambrose Graye が London で戀に落ちた

當人である事が分る。Aldclyffe は London から Æneas Manston を呼んで家政の處理をさせる。彼は Cytherea を戀する。けれども Cytherea には兄と同僚の Edward Springrove といふ戀人がある。その上 Manston は既に妻のある身なのだ。彼はひどい手段を盡して Cytherea と結婚しようとするが、事現れて獄中で自殺をする。實は彼は Miss Aldclyffe の子であつた。昔 Graye と結婚しなかつたのもその爲であつたのだ。Cytherea は Springrove と結婚をする。

2. *Under the Greenwood Tree.*

Fancy Day は Dick Dewy と Shiner との兩人に戀される。牧師の Arthur Maybold はそれを知らずに Fancy に結婚を求める。Fancy はそれを受ける。牧師は事情を聞き知つて、その事を Fancy に書いてやる。Fancy も同時に牧師へ申譯の手紙を出したのであつた。

Dick と Fancy はめでたく結婚する。

3. *A Pair of Blue Eyes.*

Stephen Fitzmaurice Smith は寺院修復の用で Endelstow へ行く。牧師の Swancourt 家に泊つてゐる中に娘の Elfride と戀仲になる。Stephen は自分の素性をわざと隱してゐたのが一寸した事から知れて、牧師は隱し立てをしてゐた事を非常に腹を立て、Elfride との約束を拒む。

Stephen は London に歸つてからも Elfride と文通をして、たうとう Plymouth で結婚しようといふ事になる。ところが結婚許可は London でなければ無効なのだ。Elfride は氣が咎めて、Stephen と別れて家に歸る。

Elfride はその後 London へ出て Henry Knight を戀する。しかし Stephen との關係を知つて、Knight は彼女を振りすてる。曩に失望のあまり印度へ渡つてゐた Stephen Smith は二度目に歸國

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook